

東松島市野蒜 東名運河付近 津波の威力で東名運河に流された家屋などの瓦礫。現在は全て撤去されたものの、爪痕は深い。



被災直後



現在

東松島市野蒜 東名駅付近 線路はめくれ、駅は全壊。現在、プラットフォームのみが残され、駅は平成27年度に内陸部に新設予定。



被災直後



現在



宮城県 東松島市 鳴瀬被災者サポートセンター 片岡 君江 所長

本当の復興はこれから。みなさんの支援の中で、被災者同士支え合いながら、一歩ずつ前へ進んでいます。

集まれる場が「光」を生む

私の働く被災者サポートセンターでは、支援員が仮設住宅を回り、心身のケアや自立に向けた支援を行っています。住居や施設などのハード面は整備されてきたものの、日々訪れる余震の恐怖や不安から、開設当初は入所者同士で会話もありませんでした。そこで、訪問活動を繰り返し、お茶会を開催。すると、ただお茶を飲むだけでなく、「みんなで何かやりたい」と声が上がることが多くなり、縫い物や編み物を始めました。不安だらけの毎日の中、知らない人同士がこういう活動を通してつながりが生まれ、

「生きる目標」が生まれたことが何より嬉しかったです。

みなさんに伝えたいこと

まずは、「想定外」を乗り越えること。東松島市には、津波により特に被害が大きかった地域があります。その地域には過去の経験から5mの防潮堤が設置されていました。平成22年に起きたチリ地震での津波を防いだこともあり、その地域の人々は、今回の地震で警報がでたものの、先人観から避難所に逃げなかつたことが原因と考えられています。また、指定避難所までたどり着いたにも関わらず、そこま

絆の力が最大の防災

「安全だ」といわれている場所でも災害は起こります。個人個人で防災を意識することに加え、気兼ねなく助け合える地域での繋がりを築いておくことが大切です。関係が希薄化した時代といわれますが、「まさか」が起きた時に、支えてくれるのは「人」。その時のためにも、普段から地域が手を取り合い、助け合える「共助」の環境を作っておくことが、最大の防災だと思います。



平成23年3月11日14時46分18秒、宮城県牡鹿半島の東南東沖130kmの海底を震源とする東北地方太平洋沖地震が発生。地震の規模はマグニチュード9.0、最大震度7。日本周辺における観測史上最大の地震。震源域は岩手県沖から茨城県沖までの南北約500km、東西約200kmの約10万平方kmという広範囲におよんだ。【写真 東松島市大曲地区】

災害から学ぶ

今、私たちにできること

東日本を襲った強烈な揺れとさまざまな威力の津波。テレビなどで映し出される惨状を前に、誰もが言葉を失いました。

あの日から2年。新しい事件や事故が起き、過ぎ去る時間とともに、「災害への備え」や「絆」への関心が薄れていませんか。家族や友人、生活のすべてを失い、深い悲しみと不安の中で過ごしている人が、今なおたくさんいます。意識が風化しつつある時だからこそ、あの日の経験から学び、「今私たちにできること」について考えてみましょう。

震災の教訓を無駄にしない

東日本大震災が起き、全国的に防災体制を見直す動きが進みました。福智町でも防災計画を見直し、より効果的な防災体制の整備を進めています。昨年度から運用を開始した「全国瞬時警報システム ジェイ・アラート」全町的な避難箇所を見直す図上訓練、消防団員の技術向上のためのポンプ操法訓練など、「公助」の向上が急務とされています。しかし、あなたやあなたの家族の命を守るには、日頃からの準備と心がけです。「非常時持ち出し品や非常用備蓄品を用意する」「ハザードマップを利用して、家族で防災につ



↑身近に起こる可能性がある災害を想定し、地図を使って行う図上訓練。町でも昨年実施しました。

また、災害時に正しい判断を行うため、正しい情報を手に入れる方法を確認しておく必要があります。災害情報を得るためには、今も昔もテレビ・ラジオなどのマスメディアが有効。ワンセグテレビ付携帯電話や手動充電ラジオなど、停電しても使えるものもあります。他にも、「防災メールまもるくん」や、各携帯電話会社による災害用伝言板など、有効なサービスが提供されています。

「公助」「自助」そして…

災害はいつどこで発生するかわかりません。「備えあれば憂いなし」といいますが、災害の経験が比較的少ない私たちは、どう備え、何が必要なのか、予測しにくいのが現状です。「今、私たちができること」は他に何かあるのでしょうか。実際に東日本大震災を経験された、東松島市の片岡君江さんにお話を伺いました。

津波が押し寄せ、多く人が犠牲に。まさしく「想定外」。普段から想定以上を意識する必要性を感じました。

そしてもう一つは、「地域の絆」の大切さです。宮戸島というところがあります。宮戸島は地震による津波ですべてが流されましたが、亡くなったのはたった一人。もともとこの地域は、住民同士の絆が強く、日頃から避難訓練や、高齢者などの要介護者の確認をしていたため、住民が協力して迅速な避難ができました。また、宮戸島の絆の力は震災当初だけでなく、特産品である海苔の再生で発揮されました。家族や船、伝統の仕掛けや機械など全てが海に流され、ゼロの状態から復興を決意。若手を中心となつて生産組合を立ち上げ、ごみの撤去から種付け・収穫にいたるまで、震災から約1年半で再建しました。